

飛鳥水落・石神遺跡の調査

飛鳥・藤原宮跡発掘調査部

飛鳥寺の北方で、雷丘の東方に広がる水田地帯は、古くから飛鳥浄御原宮跡と推定されてきたが、本格的な調査は行なわれておらず、組織的な発掘が望まれてきた。当研究所は昭和56年度からこの地域の継続的な調査を行なうこととし、初年度はまず石神遺跡の調査を計画し、併せて史跡飛鳥水落遺跡の整備に伴う調査を実施した。この結果、飛鳥水落遺跡が『日本書紀』斉明6年(660)条にある中大兄皇子(後の天智天皇)がわが国に初めて造ったとある漏刻の遺跡である可能性が高いことが判明するなど、重要な成果を得たので、その概要を報告する。

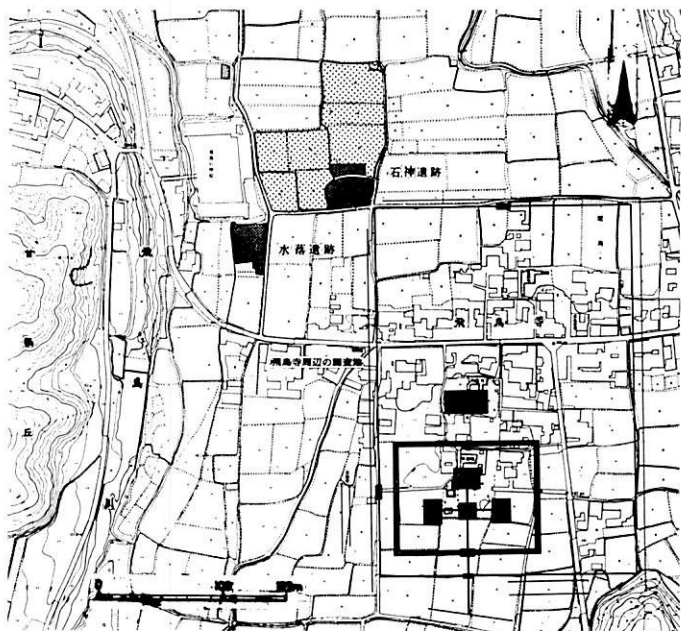
1. 飛鳥水落遺跡の調査

水落遺跡は昭和47年に民家の新築に伴う事前調査で発見され、飛鳥浄御原宮推定地の一面を占める重要な遺跡として昭和51年に国の史跡に指定されている。今回の調査は史跡整備事業の一環として、前回に調査できなかった部分を明らかにすることを目的として実施し、特殊な構造をもつ礎石建物1棟と掘立柱建物について、規模・構造を把握することができた。

遺構 礎石建物は中央を除くすべてに柱を備えた4間四方(1辺10.95m、柱間2.74m等間)の方形の平面をもつことを確かめた。礎石は基壇面下約1mの位置にあって、礎石上面中央には径40cm、深さ12cmのほり込みがある。柱は塔心柱の場合のように、基壇築成の途中で据えられたこの礎石のほり込みに挿入して立てられ、版築状に積んだ基壇土に埋め込まれていたことが明らかである。この堅固な構造をさらに強固なものにするために、地中の礎石相互の間に、径50cmの自然石を並べ、外周の礎石では同様の石を柱筋方向と対角線上に連ねて礎石のズレを防いでいる。

このように周到な配慮をもって造られた建物は、他に類例のないもので、遺構の特殊な性格を示すものとして注目される。

礎石建物の基壇外周は、径1m程の花崗岩を敷きつめた方形の石組構状になっている。溝の側壁は、建物側で高さ0.9~1.2m、外側で0.6m程で、17°~20°の緩い傾斜で



調査位置図(網目は小字「石神」)

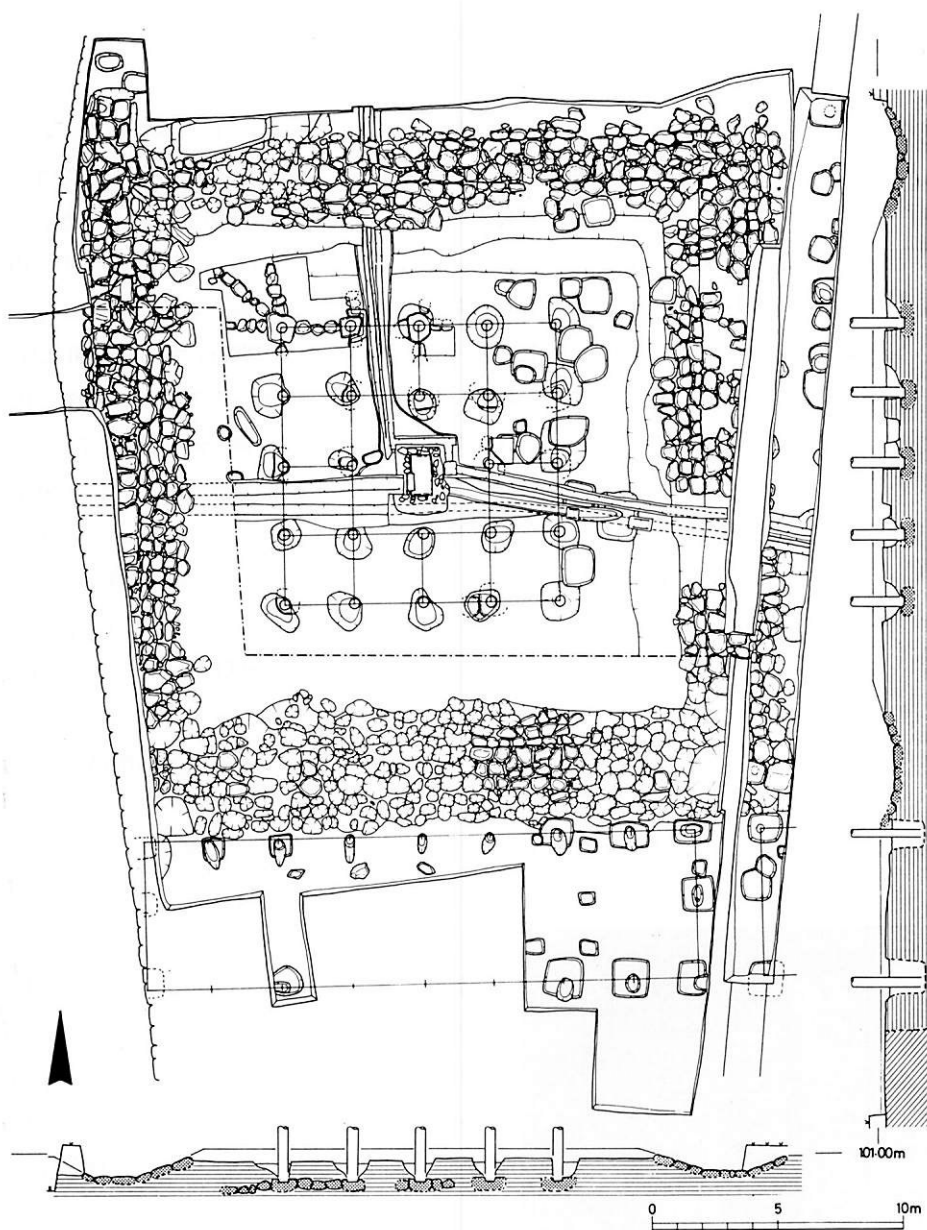
立ちあがっている。溝の底は幅 1.8 m、基壇の下辺となる底内辺長は約 22.4 m である。溝底は東南で高く、西北に約 40 cm の比高差で低くなる。底石は西北端で北に突き出して、西に折れ、排水口となっている。溝底の傾き、堆積土の状況から、この溝は常時水をたたえたものではなかったと考えられる。

基壇は、深さ約 1.5 m の掘込地業を行なって築成されているが、この地業は礎石建物の南側にある桁行 8 間 (22m)、梁行 2 間 (5.8m) の掘立柱建物を含む広い範囲に及んでいる。掘立柱建物の東側には、柱筋をそろえた東西棟の西妻柱列とみられる 3 個の柱穴があり、石組溝の南にも礎石建物と同時に計画された一連の施設が広がっていることが明らかである。

基壇内では、木樋暗渠・銅管・漆塗木箱を検出した。これらは水を利用する一連の施設であり、すべて基壇築成の途中で造りつけられている。基壇土がさらにその上に積まれ、周囲の石張りが完成されていることから、これらが建物と一体のものとして計画された施設であることは明らかである。基壇中央の方形の穴の底に、花崗岩台石とその上に置いた漆塗木箱の残片があった。台石は南北 2.2 m、東西 1.6 m、厚さ 0.6 m で、上面西寄りに南北 1.65 m、東西 0.85 m、深さ 4 cm の矩形のえぐりこみがあり、えぐりこみの西辺南半の幅 65 cm 程の部分が西に開いている。漆塗木箱はこのえぐりこみに内接して置かれているが、木質部は腐朽し、漆の被膜のみが残っている。木箱は底材が厚さ 13 cm の一枚板で造られており、深さは 1 m 以上あったものと推定される。この漆塗木箱は建物のまさに中央に据えられており、建物の機能と特に重要なかわりをもつものと考えられる。

木樋・銅管はこの木箱を中心に配置されている。木樋は丸太を U 字形にくりぬいて盖板をのせたもので、東辺からは 2 本が中央に向って敷設されている。北側の 1 本は内径約 20 cm、厚さ 10 cm 程の木樋で、木箱付近でマス状施設にとりつき、そこから北に直角に折れ、さらに台石を迂回して基壇北側に流れる木樋につながっている。マスの東 1.8 m、建物の入側柱に接するところにはラッパ状の銅管 (内径 2.3~5 cm) が木樋に挿入されている。この銅管は当初は柱に沿って基壇上にのびていたと考えられる。南側の 1 本は台石をかすめて基壇西方に抜けている。この木樋の北側に、台石の排水口にとりつくやや太い木樋があり、並行して基壇西方に抜けている。また漆塗木箱の西側からほぼ南北の木樋に沿う形で、小銅管が敷設されている。長さ約 80 cm、外径 1.2 cm、内径 0.9 cm の管を「ろう付け」で継いだもので、3 cm 幅の板材で被覆した上で木樋に納めている。14.4 m 分を検出したが、この距離の間で 73 cm 北へ低くなっている。南端は木箱付近で削平されており明らかにできなかった。

調査の成果から水の流れを復原してみると、まず東方から木樋で導かれた水は、マスを閉じ、サイフォンの原理でラッパ状銅管をのぼり、基壇上に汲み上げられる。基壇上の水は、一旦は漆塗木箱に貯えられた後、台石の排水口から木樋を通して基壇西方へ流れ出るということになる。漆塗木箱の底には極く微細な砂が堆積しており、木樋の底の粗い砂との比較で考えると、基壇上部の施設では特に清浄な水が必要とされたことがわかる。



水落遺跡遺構図

まとめ 検出遺構の年代は、建物基壇及び石組溝の堆積土から7世紀中頃の土器が出土していることから、斉明朝とすることができる。この遺構の年代、周到に造られた水利用の施設、さらに他に類をみない堅固な建物構造を総合して判断すれば、これが斉明6年(660)に中大兄皇子によって造られた、わが国最初の漏刻台の跡と考えるのが妥当である。検出された遺構の特徴は『延喜式』などの漏刻に関する記載とも符合する。しかしなお、漏刻の具体的な構造の問題や、導水元、小銅管の行く先などを含めた周辺遺構との関係など、今後さらに広く調査・

検討を進めなければ解決できない問題も数多く残されている。

2. 石神遺跡の調査

旧飛鳥小学校東方の小字「石神」の水田は明治35年に「須弥山石・石人像」の出土した土地として知られ、昭和11年には石田茂作氏らによる調査も行なわれている。今年度に始まる継続調査の手始めとして、まずこの昭和11年調査地の再確認から調査を進めることとした。

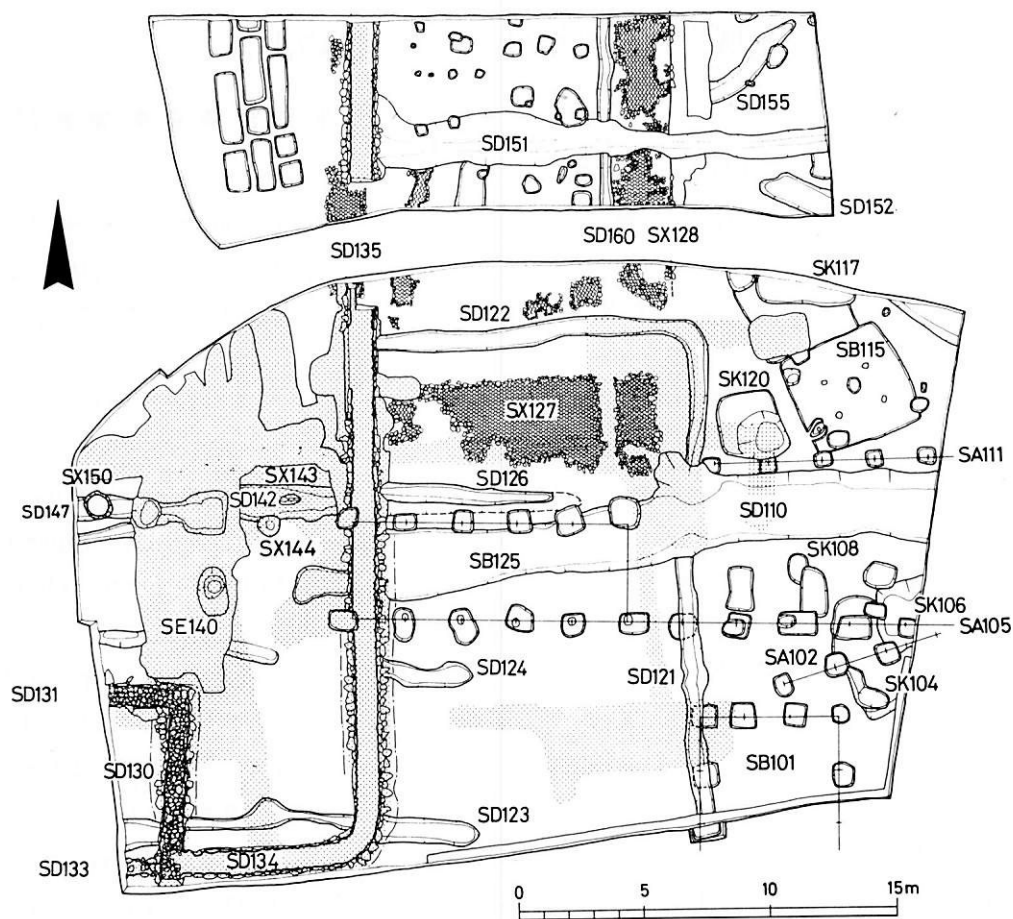
遺構 検出した主な遺構は7世紀前半～中頃と後半の2期に分かれる。7世紀前半～中頃の遺構としては石組構SD130・131・133・134・135などがある。これらは広範囲にめぐらされた一連の導・排水施設で、底石の有無・側石の積み方の差から、SD130以西の溝とSD134・135とは性格の違いが推測される。石組溝SD130は調査区西南の南北溝で幅0.8m、深さ0.7m。調査区南端から12m北で西に折れ、石組溝SD131となる。高さ60cmの一枚石を立てならべて側石とし、底には20cm大の玉石を敷いている。SD130の南端西側にとりつくSD133は幅45cm、深さ45cmで、他の溝より小さいものの、一枚石を立てならべる点では共通する。底には40×25cm大、厚さ20cm程の矩形の石を敷き、西から東へ段々に下る石畳としている。SD130の東側にはSD133と南側石をそろえた東西溝SD134がとりつく。SD134は幅0.9m、深さ0.8mで、東へ7mのところを弧を描いて北に折れ、南北溝SD135となる。40cm大の自然石を3～4段横積みにして側石としており、底石はない。溝内は昭和11年の調査でほぼ完掘されていたが、北半に掘り残された部分があり、堆積層を確認できた。溝内堆積層は底から5cmが灰色細砂、その上50cmが灰色粗砂であり、激しい流水の跡がうかがえる。またその上は暗褐色粘土で埋められ、さらに厚さ15cmの整地土を介して7世紀後半の石敷遺構が造られている。堆積層及び埋土から7世紀中頃の土器が少量出土した。



石組溝 SD130 (北から)

石溝にかこまれた石造物出土地周辺は昭和11年の調査トレンチが深く及んでおり、当初の状況は確認できなかったが、幸いにも旧トレンチ外の二カ所で石造物痕跡SX150・144を検出することができた。SX150は風化・剝離した花崗岩の薄層が輪状に残ったもので、明治35年に発見された「須弥山石」第一石の上端に一致し、発見時にすでに天地逆の状態であったことがわかる。遺構の層位から石造物がここに移された時期は8～12世紀の間と推定されるが、その原位置もここからさほど遠方にあるとは考えられない。

7世紀後半の遺構としては石敷遺構SX127、石列SX128・143、掘立柱建物SB125、掘立柱塀SA105などがある。石敷遺構SX127は、石組構



石神遺跡遺構図（網目は昭和11年調査トレンチ）

を埋めた後に20 cm 大の玉石を敷きつめたもので、東西16 m、南北19 m以上の広がりを持ち、東端と南端は石列 SX 128・143によって区切られている。掘立柱建物 SB 125は桁行5間(2.2 m 等間)、梁行1間(3.8 m)の東西棟で、西端の柱穴は石組溝 SD 135の西側石をこわして造られる。SB 125の南側柱列にとりつく東西塀 SA 105は、柱間2.2 m 等間で、5間分を検出した。

この他に、7世紀代の遺構として掘立柱建物 SB 101、掘立柱塀 SA 111などがある。柱穴の出土土器からみて、いずれも7世紀の前半にまで遡る可能性がある。

まとめ 7世紀前半～中頃の石組溝は、石造物群を含めた大きな庭園の一部と推定される。水路を主とする遺構の特徴、年代、また位置関係からも、前述の水落遺跡の漏刻と深い関わりをもつことは明らかである。斉明6年(660)の「石上池辺」での須弥山造立記事に対応する可能性も考えられる。7世紀後半の石敷遺構と石列は中ツ道の想定位置で検出されたが、南を建物に塞がれるなど、この部分を道路と考えるには問題が多い。7世紀後半における飛鳥浄御原宮の造営との関連を含め、今後の課題としたい。

(岩本圭輔)